

近代イギリスにおける「賭け」とその規制

—— 全国反賭博連盟（National Anti-Gambling League）の活動を中心に ——

鍵 谷 寛 佑

はじめに

ここでは、筆者の主たる研究テーマである競馬に付随する「賭け」が、特に19世紀末から20世紀初頭にかけて、深刻な社会問題として規制の対象となっていく過程について考察する。その際、中心的な役割を担ったのが、中産階級の人々によって、1890年ごろに結成された全国反賭博連盟（National Anti-Gambling League, NAGL）である。ここでは、人々に大きな災いをもたらすとされた不道德な賭けが規制され、新たな社会秩序が構築されていく様子を描き出したい。

まず、史料に関してだが、全国反賭博連盟の創設者であるフレデリック・アンソニー・アトキンス（Frederic Anthony Atkins）が、1890年に出版した *Moral Muscle, and How to Use It: A Brotherly Chat with Young Men* と、同連盟の主要メンバー、ベンジャミン・シーボウム・ラウントリー（Benjamin Seebohm Rowntree, 1871-1954）が、1905年に出版した *Betting and Gambling: A National Evil* を挙げておきたい¹。彼らは、これらの著作の中で、ともに全国反賭博連盟を支える重要メンバーとして、特に労働者階級の賭けに対する強い反対を示した。

先行研究では、以下のものが挙げられる。ロス・マッキビン（Ross McKibbin）は、1880年から1939年までのイギリスにおける労働者階級の賭けを扱ったが、彼の研究の特筆すべき点は、多くの賭けに関する先行研究が賭けに対して否定的な見解を示す中で、賭けが労働者階級にとって、そのコミュニティを拡大させるきっかけとなり、ある種の知的なゲームとして浸透したことを指摘していることである²。

デイビッド・C・イツコウィッツ（David C. Itzkowitz）の研究は、ヴィクトリア期のブックメーカーとその顧客について扱ったもので、この時期に事業を拡大させていくブックメーカーが、法をたくみにかわし、顧客を獲得してゆく様子を指摘している³。

マーク・クラブソン（Mark Clapson）の研究では、民衆の賭け（popular gambling）とイギリス社会、賭けに対する福音主義的運動としての全国反賭博連盟の活動が描かれ

ており⁴、イギリス社会に根付く賭けの広範囲さと、それに立ち向かう全国反賭博連盟の強い意志が理解される。

また、賭けの比較史という点では、ロジャー・マンティング（Roger Munting）の研究が挙げられ、彼は、イギリスとアメリカにおける賭け（gambling）の社会経済史を、競馬やフットボールなどの具体的事例から紐解いている⁵。

先の4つの研究は、主に労働者階級の賭けに焦点が当てられたものであるが、上流階級の賭けの様子を理解する際の手助けとなるのが、ロンドンの様々なクラブを扱ったジョン・ティンブズ（John Timbs）とラルフ・ネヴィル（Ralph Nevill）の著作である⁶。上流階級の人々は、労働者階級の人々が到底入ることのできないクラブの中に設けられた部屋で、自由に賭けを行っていた。この点は、今回の主たるテーマである労働者階級の賭けと大きく異なる点であるため、強調しておきたい。

1. 「賭け」の持つ意味合い

イギリス刑法における賭けには、「賭事〔契約〕（betting, wagering）」と「賭博（gaming, gambling）」の二種類が存在しており、これらは明確に区別されるべきものである。まず、「賭事〔契約〕」であるが、これは、公序良俗に反しない限り有効という意味合いを持っており、基本的には上流階級の賭けを指している。加えて、彼らの賭けには、断言して賭けるという強い意思表示が含まれている。競馬の一着を当てる「単勝」という馬券は、英語で“WIN”と言われるが、これは馬主としてまた賭け手として、競走に勝つことの重要性を示しており、一般大衆のギャンブルとは明確に一線を画すものである。

一方の「賭博」は、財物を賭けて競技を行うこと、またその合意を指し、競技者自身が財物を賭け、その得失が競技者自身に発生する行為とされる。これはまさに、一攫千金を期待しての賭けを指している。

先ほど、競馬における賭けの事例を取り上げたが、確かに競馬とそれに付随する賭けには、密接な関係がある。近代競馬の祖とされるイギリスの競馬を統括する団体として、18、19世紀を通じて確固たる地位を築いていくのが、ジョッキークラブ（the Jockey Club）である。1750年ごろに設立された上流階級中心のこの社交クラブは、後にイギリス競馬の、ひいては近代スポーツの先駆的な統括団体としてイギリス全土に影響力を及ぼしていくことになる。会員80名ほどのこのクラブには、多くの上流階級の議員が存在しており、特に19世紀を通じて、常に自らが有利なように競馬に関連する法をコントロールしていった。とりわけ、競馬に付随する賭けに関して、度重なる賭事法の改正の中で、自らの階級的優位を保ち続けた。「賭け」と一言で言っても、そ

れは階級によって大きく意味合いの違うもので、これには大きく分けて「賭事」と「賭博」があるということに注意せねばならない。

では、特に19世紀後半から末にかけて、規制の対象となっていく労働者階級の賭け（賭博）は、一体どのような場所で行われていたのだろうか。その答えは、ブックメーカーや競馬場近辺に必ずといっていいほど存在したパブ、または街路などである。彼らの身の丈に合わない、言わば野放しの賭けが、やがて規制の対象になり、公権力の介入を受けることになる。

ここで、労働者階級が主に賭けを行う場所であるブックメーカーについて触れておきたい。ブックメーカーは、よく「賭け屋」と訳されるが、これは、18世紀末に、イギリスのニューマーケット（Newmarket）でハリー・オグデン（Harry Ogden）という人物が開始した事業である⁷。19世紀後半では、競馬場において一人のブックメーカーが、各賭け手に賭けを募る形態もあれば、店舗型のブックメーカーも存在するなど、多様なスタイルがあった。賭けを募る際、各ブックメーカーは、それぞれの馬に独自のオッズを付け、他のブックメーカーとの差異化を図る。こうすることで、巧妙に客の購買意識を煽るのである。生活費を含め、自らの持つけなしの金で賭けを行う労働者階級にとっては、自分が予想する馬の馬券を、いかに良い倍率で買うかが重要になってくる。

先行研究で挙げたマッキビンが言うように、良い倍率で賭けることは労働者階級の人々にとって、ある意味「知的な」ゲームと言えるものであった。加えて、トニー・メイソン（Tony Mason）が指摘するように、「賭（gambling）にたいする人びとの対応は時期によって異なっていたけれども、賭はつねに近代スポーツ界の一部となってきた」のである⁸。その中でも、常に問題視されたのが、競馬に関連した賭けであった。では、具体的に賭けに対してどのような批判があったのか、19世紀後半から19世紀末の事例を見ていくことにしたい。

2. 19世紀後半から19世紀末にかけての賭けに対する批判

まずは、1852年の、19歳エドワード・フレデリック・タワーゼイの事例である⁹。

「ミドルセックス治安判事裁判所—ウィザム氏は、なぜその囚人（エドワード・フレデリック・タワーゼイ、19歳）が短期間で多額の金（100ポンド）を整理できたのかを問うた。検察官は、囚人が近隣のベッティング・ハウス（the betting-houses）で賭け（gambled）をしたことを突き止めた」と答えた。ウィザム氏は、これらのベッティング・ハウスが今や社会の厄介者になっており、議会

がそれらを一掃する正当性をすぐに認識することを望むと述べた。非常に多くの徒弟の少年たちが、それらによって競馬の賭け (betting on horse racing) ですぐに富を築くことができると信じ込まされ、彼らの親方から金品を奪うよう仕向けられた。彼 (ウィザム氏) は、彼 (タワーゼイ) に禁固12カ月と重労働の判決を下した。」

ここでは、bet と gamble が併用されているが、当時の史料では、先の刑法のように明確に区別されていない場合もあり、特に競馬の賭けには、bet という語を使用する場合が多い。しかし、gamble は概して労働者階級の賭けのみを指すことは、繰り返し強調しておきたい。当時、中産階級が数人のサーヴァントを抱えて、一年間生活するのに必要だった金額が、300ポンドほどと言われている。労働者階級が100ポンドもの金を短期間で使うことは、極めて異常な事態であったと言えよう。史料に登場するベッティング・ハウスは、翌年の1853年のベッティング・ハウス法 (Betting Houses Act) で、違法とされた¹⁰。

続いて、時代が下って19世紀末の事例であるが、ロンドンのクラブにおける賭けの取り締まりに関して、タイムズ紙に以下の内容が掲載された¹¹。

「最近、警察が、賭け (gambling) が体系的に続けられていた二つのロンドンのクラブへの一斉検挙を行ったこと、また、多くの (中には、良い社会的地位にある) 人々の逮捕に関しては、管理権を有する裁判所によって、提起された事実と法律の諸問題が裁定されるまで、コメントすることはできない。しかし、いずれにしても、当局の行動は、全階級の思慮深く、公德心に富む人々の間で成長している感情に対して、無感覚でないことを示しており、様々な形式における賭け (gambling) の増大は、ほとんど国家的危機に匹敵する大きさを呈している。」

この記事は、ロンドンのクラブに関するものであるため、おそらく社会的地位のある人々の事例であると推測されるが、この記事が掲載された1889年に、イギリスにおいて賭けが大きな社会問題になっていたことは間違いない。

労働者階級の賭け、すなわち賭博は、当然のことながら大問題となっていた。ここでは、ある不良集団の事例を挙げておく¹²。

「先頃から、サリー運河のほとり、オールド・ケント・ロード・ブリッジと

ペッカムのグレンゴール・ブリッジの間は、日曜日に賭博 (gambling) の目的で集まった若者と少年の大集団で一杯であり、その不道德なものに終止符を打つという目的を持った地方警察が、昨日の午後、急にその場に現われ、25人を逮捕した。」

この記事から、19世紀末に、公権力が労働者階級の野放しの賭博を不道德なものとなし、その統制に乗り出していたということがわかる。本節で見てきたように、19世紀後半から19世紀末にかけて、賭けにおける諸問題が浮き彫りになり、様々な社会改革運動の中で、全国反賭博連盟が結成されることになる。

3. 全国反賭博連盟の結成

全国反賭博連盟は、1890年ごろに *The Young Man* の編集者であったフレデリック・アンソニー・アトキンスによって結成された。*The Young Man* はその名の通り、YMCA と大きな関係を持っていた¹³。全国反賭博連盟は、特に、非国教徒のプロテスタント教会の結託によって成立したと言われており¹⁴、中産階級主導による、賭けに対する明確な反対意識を持っていた。その本部は、ロンドンのウェストミンスターに置かれ、マンチェスター、ヨークには支部が存在しており、全国的な広がりを見せていた。

ここで、創設者アトキンスの *Moral Muscle, and How to Use It: A Brotherly Chat with Young Men* に見られる賭博に対する意識を見てみよう。彼は、人生における戦いで失敗、絶望に追い込まれる例として、まず lack of faith (信仰心の欠如) を挙げている¹⁵。これは、キリスト教の観点から見て、当然のことと言える。二つ目は、ill health (不健康) である¹⁶。人間は、健康であって初めて職務を全うでき、様々な困難に立ち向かっていくことができる。そして、三点目が gambling (賭博) であり、彼は、この著作の中で「どんなに輝かしく、前途有望な生涯も、賭博によって台無しにさせられる」と記しており¹⁷、全国反賭博連盟の結成者として、賭博に対する強い反発心を持っていたことが窺える。加えて、「信仰心の欠如」や「不健康」と並ぶ形で「賭博」が挙げられているという事実は、先のタイムズの史料で示したように、当時のイギリス社会にとって賭博が極めて重大な社会問題であったことを表しているといえよう。

同連盟の著名なメンバーには、ヨークにおける貧困問題の深刻さを調査した人物として知られるシーボーム・ラウンタリーがいる¹⁸。先に史料として紹介した彼の著作、*Betting and Gambling: A National Evil* は、ヴィクトリア時代のイギリスにおける賭博 (gambling) に対する人々の嫌悪を記したものであるが、メンバーのこうした積極的な

著作活動も、社会改革運動の一つと言えるだろう。特に、クラブソンが言うように、「賭博がイギリス中の風紀を乱し、イギリスの名声を傷つけることにに対する解決策は、禁酒運動で部分的にモデル化された福音主義的運動の中で求められた」ので¹⁹、こうした反賭博の動きは、様々な社会問題と関連する側面を持っている。

さて、全国反賭博連盟の関心は、主に、労働者階級の賭博 (gambling) にあり、彼らは、労働者階級の賭博が無責任かつ第二の貧困の主要因であると考えていた²⁰。先のラウントリーの著作、*Betting and Gambling: A National Evil* の序文には、「がんのように、有害なもの (賭博、gambling) はその土地の全体にわたってその有毒な根を広げて、それらは、悲惨、貧困、気弱さおよび犯罪を生んだ」とあり²¹、賭博の引き起こす諸問題が指摘されている。

第一節で、イギリス競馬統括団体ジョッキー・クラブについて触れたが、全国反賭博連盟は、ジョッキー・クラブの本拠地であったニューマーケットの飲食店で行われている違法な賭けを野放しにしている彼らに対して、タイムズ紙上でたびたび意見交換を行っていた²²。これは、競馬の庇護者たる上流階級中心のクラブに対する、社会改革を目指す中産階級の挑戦といえるものであった。そればかりでなく、全国反賭博連盟は、年に二回『会報』を発行するなど、メディアを最大限に活用し、1930年代まで積極的に活動したと言われている。では次に、全国反賭博連盟の『会報』から、彼らの連盟像を紐解いていきたい。

4. 全国反賭博連盟の『会報』

まず、全国反賭博連盟のメンバー構成に関して、彼らが発行していた『会報』(*The Bulletin*) から紐解いてゆく。創設から約8年を経た1898年11月における全国反賭博連盟のメンバー構成をみていくと、掲載されているメンバーは31名で、会長職はアバディーン伯 (The Right Hon. Earl of Aberdeen) が務めていた²³。副会長の数が22名と多いが、ミース伯 (The Right Hon. The Earl of Meath) を筆頭に、Dean や Bishop といった、特に宗教関連の職に就くメンバーが数多く存在しており、例えば、副会長職に就いていたザ・ディーン・オブ・ノリッチ (The Dean of Norwich, D. D.)、ザ・ディーン・オブ・カンタベリー (The Dean of Canterbury)、ザ・ビショップ・オブ・ピーターバラ (The Bishop of Peterborough) といった人々を挙げることができる²⁴。

次に、連盟の目的だが、『会報』には、「賭事 (Betting)」と「賭博 (Gambling)」のすべての形式に、精力的かつ断固とした反対を示し、すべての階級に主題についての有用な情報を普及すること²⁵、とある。連盟の主な関心が、労働者階級の賭け (賭博) の根絶にあったことは間違いないが、それに加えて、全階級的な賭けの根絶も意図して

いたことが窺える。また、彼らの活動手段は、①リーフレット、パンフレット、小冊子などの広範囲の配布、②国のあらゆる地域での講義および市民集会の組織、③現行法の公平な適用、④望ましい議会における修正法案の促進という4点であり²⁶、特に、①、②のような人々の目に大々的に触れる活動から、③、④のような法律へ挑戦する意気込みも垣間見える。

最後に、「メンバー・シップ」の項目に関してだが、ここでは、「連盟のメンバーは、(中略)、より健全な世論を促進するのを支援することが期待される」、また「彼らは、郵便料金前払いで、連盟の『会報』などの発行物を受け取るだろう」との記述があり²⁷、名目的な参加ではなく、実体の伴う参加が求められていたといえよう。また、連盟の発行物を受け取ることで、常に連盟の活動内容を理解し、その価値観を共有していたと思われる。

5. 全国反賭博連盟の具体的活動

ここでは、全国反賭博連盟の具体的活動について見ていきたい。まずは、この団体の中心的人物に関してだが、それは、名誉事務局長であったジョン・ホーク (John Hawke) という人物であった²⁸。彼は、1892年、タイムズ紙のコラム “MISSING WORD” において、くじ (ロッタリー) と題した記事を執筆し、当時行われていた大規模なくじに対する批判を展開した²⁹。このくじは、競馬の賭けとは異なるが、一攫千金を狙って賭けを行うという意味で、明らかに賭博の一種であったので、全国反賭博連盟によって問題視された。

ホークは、1893年に、*A Blot of the Queen's Reign: Betting and Gambling, Appeal to the Prince of Wales* という小冊子を出版した³⁰。こうした事実からも、全国反賭博連盟の設立当初からの積極的活動が理解されよう。この小冊子は、「競馬場は、国の風紀を乱す巨大な原動力である」というビーコンズフィールド卿 (Lord Beaconsfield) の指摘で始まるが³¹、そこには全国反賭博連盟の競馬の賭けに対する強い批判が表れている。

また、ホークは、1894年のタイムズの記事で以下の3点を、広く世間にアピールしている³²。それは、①連盟が宗教的、政治的見解によって完全に束縛を解かれていること、②ハーバート・スペンサー氏が支持者の一人であること、③議会议案の一つが先の保守党政府の有名議員の手中にあることで、特に②の内容が与えた社会的影響は極めて大きかったと推測される。当時名声を博していたスペンサーを支持者と公言することで、自らの組織がイギリス社会を改良していく上で、有意義な存在であるというアピールになったと考えられるし、同時に彼の社会哲学に影響を受けた部分もあったと思われる。

そうした中で、上流階級とのせめぎ合いが起こっていくが、全国反賭博連盟は、情報発信と法の支配への試みを続けていく。では次に、彼らのロンドンにおける大規模デモの一例を見てみたい。

このデモは、設立後まもなくの1890年6月15日（日）の午後、ピカデリーのセント・ジェームズ・ホールで行われたが、その抗議内容は、増加する賭事と賭博の災い（the increasing evils of betting and gambling）に対するものであった³³。デモの統括は、連盟のメンバーであったヒュー・プライス・ヒュース師（The Rev. Hugh Price Hughes）で、デモの始まりは、連盟の名譽事務局長アトキンスによるダーラム主教（the Bishop of Durham）からの手紙の朗読であり、その内容は「賭博の災い（The evil of gambling）は、至る所で強力であるが、実に北部において痛ましく広がっている」というものであった³⁴。主教から北部の実情が伝えられることで、その深刻さが浮き彫りになった。

続いて、J・W・ホースレー師（The Rev. J. W. Horsley）による演説が行われたが、演説では、「賭博（gambling）に対する人の意見は、常に他のすべての道徳的問題において確かな感情の徴候が見られる」ことが語られ、また多くの人々が、「プリンス・オブ・ウェールズはどうだ？」と呼応し³⁵、彼の賭けに対して批判が加えられた。このプリンス・オブ・ウェールズは、後のエドワード7世で、彼は賭けと競馬に情熱を注いだ人物として知られている。ここでは、国を代表するロイヤル・ファミリーの一員が、イギリスにとって大きな社会問題となっている賭けに興じる態度が、非難の対象となっている。デモの最後では、統括者のヒュー・プライス・ヒュース師が、「新聞における賭事情報の公表（the publication of betting intelligence）を完全に禁じる、簡潔な議会法令が通過されるべきだ」と提案し、加えて、「賭博（gambling）と賭事（betting）は窃盗に繋がる、決闘が人を死に至らせるように」と主張した³⁶。賭けの不道徳さを大規模なデモでアピールすることで、彼らの価値観を一般に浸透させ、新しい社会秩序を構築していこうという明確な意思が見られた。

6. 20世紀初頭における全国反賭博連盟の運動の高まり

最後に、20世紀初頭における全国反賭博連盟の運動の高まりについて見ていく。19世紀から20世紀への世紀転換期において、上流階級も労働者階級の賭博に対して認識を変化させた。1901年に、賭博に関する上院特別委員会が設置されたことは、その一例であろう。しかし当初、全国反賭博連盟が意図した賭博の撲滅には至らず、特にジョッキークラブメンバーの圧力により、数々の法案が却下され、その後、上院ではいかなる制限も街路での賭けに照準を合わせるべきだという意見が主流をなしていく³⁷。

松井良明氏は、1906年に、反賭博法に賛成する自由党が勝利したこと、ロンドンのブックメーカーによる警察の買収事件など、社会の闇の部分が大きく取りざたされたことで、「街路賭事法」が議会を通過したという成果を、上流階級と中産階級の議員の多くが労働者階級の賭事を社会的かつ経済的に問題だとする見方を共有しつつあった結果だとしている³⁸。筆者もこの意見に賛成で、移りゆく時代の中で、上流階級と中産階級の、労働者階級の賭博への反対という部分的な意識融合がなされたと考えているし、1906年に「街路賭事法」という具体的な法律が完成したことで、全国反賭博連盟の活動が、この時期にある一定の成功を収めたと結論づけている。

おわりに

今回は、全国反賭博連盟の活動に焦点を当てるとともに、特に19世紀末から20世紀初頭にかけて、「賭け」が深刻な社会問題として規制の対象となっていく過程について考察した。「賭け」の規制の過程は、他の多くの社会問題を解決していく際の事例と、極めて似通った部分があった。

今後、筆者の研究に関連する課題として、「世紀転換期におけるジョッキー・クラブの賭けに対する具体的な対応策」や「全国反賭博連盟と他の社会改革団体との関連性」などが挙げられるが、これらは別稿に譲ることとしたい。

〈註〉

- 1 Frederick Anthony Atkins, *Moral Muscle, and How to Use It: A Brotherly Chat with Young Men* (New York, 1890). Benjamin Seebohm Rowntree, *Betting and Gambling: A National Evil* (London, 1905).
- 2 Ross McKibbin, 'Working-Class Gambling in Britain 1880-1939', *Past and Present*, No. 82, 1979, pp. 147-178.
- 3 David C. Itzkowitz, 'Victorian Bookmakers and Their Customers', *Victorian Studies*, Vol. 32, No. 1, 1988, pp. 6-30.
- 4 Mark Clapson, *A Bit of a Flutter: Popular Gambling and English Society, C. 1823-1961* (Manchester, 1992).
- 5 Roger Munting, *An Economic and Social History of Gambling in Britain and the USA* (Manchester, 1996).
- 6 John Timbs, *Clubs and Club Life in London: With Anecdotes of Its Famous Coffee Houses, Hostelrys, and Taverns, from the Seventeenth Century to the Present Time* (London, 1872). Ralph Nevill, *London Clubs: Their History and Treasures* (London, 1911).
- 7 Wray Vamplew, Joyce Kay (eds.), *Encyclopedia of British Horseracing* (London, 2005), p. 50.
- 8 トニー・メイソン (松村高夫、山内文明訳) 『英国スポーツの文化』 同文館出版、1991年、94頁。

- 9 *The Times*, Tuesday, 01 Jun, 1852, p. 7. (Issue 21130)
- 10 Jim Orford, Kerry Sproston, Bob Erens, Clarissa White, Laura Mitchell, *Gambling and Problem Gambling in Britain* (Hove, 2003), p. 3.
- 11 *The Times*, Thursday, 16 May, 1889, p. 9. (Issue 32700)
- 12 *The Times*, Monday, 17 Jun, 1889, p. 12. (Issue 32727)
- 13 この点は、先のアトキンスの著作、*Moral Muscle, and How to Use It: A Brotherly Chat with Young Men* の導入部で触れられている。
- 14 Mark Clapson, *op. cit.*, p. 29.
- 15 Frederick Anthony Atkins, *op. cit.*, p. 59.
- 16 *Ibid.*, p. 61.
- 17 *Ibid.*, p. 62.
- 18 Emma Casey, ‘Gambling and Consumption: Working-Class Women and UK National Lottery’, *Journal of Consumer Culture*, Vol. 3, 2003, p. 246.
- 19 Mark Clapson, *op. cit.*, p. 30.
- 20 Emma Casey, *op. cit.*, p. 246.
- 21 Benjamin Seebohm Rowntree, *op. cit.*, p. vii.
- 22 例えば、以下の史料が挙げられる。*The Times*, Tuesday, 15 Jan, 1895, p. 6. (Issue 34474)
- 23 *The Bulletin*, Vol. 2, No. 17, 1898, p. 108.
- 24 *Ibid.*
- 25 *Ibid.*
- 26 *Ibid.*
- 27 *Ibid.*
- 28 Mark Clapson, *op. cit.*, p. 31.
- 29 *The Times*, Saturday, 17 Dec, 1892, p. 7. (Issue 33824)
- 30 John Hawke, *A Blot of the Queen's Reign: Betting and Gambling, Appeal to the Prince of Wales* (London, 1893).
- 31 *Ibid.*, p. 3.
- 32 *The Times*, Friday, 08 Jun, 1894, p. 8. (Issue 34285)
- 33 *The Times*, Monday, 16 Jun, 1890, p. 6. (Issue 33039)
- 34 *Ibid.*
- 35 *Ibid.*
- 36 *Ibid.*
- 37 松井良明『ボクシングはなぜ合法化されたのか—英国スポーツの近代史—』平凡社、2007年、154-158頁。
- 38 同上書、158頁。